た煮へくりかへつた鐵瓶を取ると、おくしめがけて投げつけましたが、體をかわしましたので鐵瓶は柱に當りました。おくしが入口を出ようとする途端に這入つて來たのが馬方の八藏、何處で飲んで來たのか千鳥足で

「ウイッ……」

「オ、八さんえゝ處へ來てくれてやつた。早うおくしを掴へとう……」

「よつしゃ……」

こら甚い人が來たと、おくしは袖の下を潜り一目散に逃げ出しました。八藏は後から追驅る、城の馬場から天滿橋まで來ましたが、何しろ相手は男、こちらは女の足とても逃げる事が出來ません。今此處で八藏に掴へられたらどの樣な憂目を見るやも知れん。一その事とおくしは橋の中央から身を躍らして川の中へドブン……。

「おくし……(新內が入る)……私は又何と思ふて此樣な處まで追ふて來たんやら、上で降つたんで水嵩が增て倒底助るまい、夫れに引替へてあの座敷では面白そうに騷いで居る。おくしの身體は此のまゝ水葬、行く先は西方極樂淨土、三味や太鼓を經陀羅に、迷はず成佛してくれよ」

と其のまゝ後も振向かずに歸つて來ました。

「姐貴」

「オ、八さん、おくしはどう仕ました」

「小娘の足で走るので到頭見失なうて仕舞ふた」

「さよか、この水で足を洗ふとくなはれ、お酒の燗が出來てる何も肴が無いので鯡が買ふたあるのんや」

「姐貴、俺はモウ酒をおくは」

「何んでやね」

「今日から此處の家へはよう來んで、今までの緣と思ふて貰ひたい」

「八さん、何が氣に入らんねん」

「いや、今日の親子喧嘩もどうせ俺の事からおこつた事やろうと思ふ。このまゝおくしが歸つてこん樣な事があつては世間へ俺は申譯がない」

「八さん、おくしも子供やなしもう年頃の娘や、何處ぞで男でも持つて暮すやろかいな」

「それが男でも持つて世帶をする樣な娘なら心配はせんが、無分別な心を起して川へでも陷つて死んで仕舞ふ樣な事があつたら……」

「そんなら八さん、おくしが死んだら貴郎を妾がよう養はんと思ふて居てか、憚りながら八さん、貴郎の一人位はたて養ひにするし」